輪島KABULET®
内閣総理大臣表彰受賞

輪島KABULET®拠点施設が令和3年度バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰において最高賞である内閣総理大臣表彰を受賞し、令和3年12月23日に首相官邸で行われた授賞式に雄谷理事長が出席しました。同施設はこれに先立ち、第22回石川県バリアフリー社会推進賞の最優秀賞も受賞しています。

バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰は、高齢者や障害者、妊婦や子供がいる人を含むすべての人が安全で快適な社会生活を送ることができるように、バリアフリー・ユニバーサルデザインの推進に極めて顕著な功績又は功労のあった施設の設備、製品開発、推進・普及のための活動を行った個人・団体に授与されるものです。

今回の受賞では、空洞化する中心市街地の空き家の利活用を通した地域コミュニティの再生や、障がいのある方や地域住民への就労の場の提供などの取組みが評価されました。

同表彰にて内閣総理大臣表彰を受賞するのは石川県では初となります。当法人の盟友、五井建築研究所の故・西川英治会長とこの受賞を分かち合いたいと思います。

第23回石川デザイン賞受賞

当法人が第23回石川デザイン賞を受賞し、令和4年2月22日に石川県庁で表彰式が行われました。

この賞は県民にデザインの重要性を広くアピールするとともに、企業、団体へのデザイン導入の促進を図るため、デザイン振興に大きく貢献した個人、団体、企業を表彰するもので、平成11年度に当時の谷本知事の主導で設けられました。

表彰式で雄谷理事長は「今回の受賞は谷本知事が任期を終える最後の年であり、このようなご縁を大変うれしく思う」と謝意を述べました。

令和2年8月

みずほ教育福祉財団より
デリバリーカー「みずほ号」を
Share金沢に
ご寄付いただきました。

令和3年10月

公益信託能登町
エンデバーファンド21により
「ビアパーク ローラー滑り台」を
改修しました。

グループホーム開設

令和3年8月
グループホーム「プエルト」（白山市）

令和3年4月
グループホーム「リサ」（白山市）

令和4年2月
グループホーム「マハロ2」（輪島市）

令和4年1月
グループホーム「マハロ1」（輪島市）

令和3年12月
グループホーム「クゥ」（金沢市）

Break through －挑戦しました!!－

日本ボディビル・フィットネス連盟主催で6月15日に開催された「KANAZAWA CHALLENG CUP2022」に野竹厚さんと森岡里絵さんがGOTCHA!WELLNESSから参加しました。

5月にブラジルで開催された聴覚障害者の国際スポーツ大会デフリンピックに佛子園職員の山口彩芽さん（女子サッカー日本代表）と門脇翠さん（陸上競技コーチ兼スタッフ）が参加しました。

表紙

「CAFÉ TAN WAJIMA」が輪島市役所2階にオープン

あとがき

新年度はトンギスカンでスタートしました。たくさん買って、たくさん食べていただいた皆様、ありがとうございました。

発行

妙林柿 81号

社会福祉法人 佛子園
石川県白山市北安田町548番地2
TEL 076-275-0616
MAIL headoffice@bussien.com
HP http://www.bussien.com
発行人 雄谷良成
発行日 令和4年6月23日

那覇市制 100 年記念 市民ごちゃまぜミュージカル「希望の街」

観天望気

伊勢真一というドキュメンタリー映画監督をご存じだろうか。二十数年来のお付き合い、きっかけは監督の姪でてんかんと知的障害をもつ少女のヒューマンドキュメンタリー「奈緒ちゃん（1995）」▼監督は驚くほどの「長尺」撮り。その後の奈緒ちゃんと家族の日々を撮り続けた「やさしくなあに」は1983年のクランクインからなんと三十五年かかっての上映▼監督との対談は一切打ち合わせをせず、何時間でも話せてしまう。幼少期に施設で育った自分、障害のある人たちと家族のように暮らした「長尺」の時間が互いを繋いでくれる▼学生時代に反戦デモに参加していた監督はウクライナやミャンマーなどテレビ等で映し出されるセンセーショナルな戦争の現象から一歩身を引いて、自分事として考えて欲しいという▼「やさしくなあに」は奈緒ちゃんが発する独特のコトバ「奈緒ちゃん語」から名付けられたタイトルで、喧嘩や意地悪が大嫌いな奈緒ちゃんはいつも小さな声で『「やさしくなあに」っていわなくちゃ』と呟く▼定年で人生の目的を見失う父、夫婦仲が悪く一度は家を出る母、人間関係でうつになる弟、今にも崩壊しそうな家族をいつの間にか奈緒ちゃんが繋ぎとめていく（監督ネタバレでゴメンナサイ）▼三年前に父が亡くなり、地域の様々な人と関わり合って暮らすことは看取ることでも看取られることでもなく「看取り合う」ことだと感じた。最近、監督は「えんとこの歌（2019）」の主人公、脳性マヒで三十数年来寝たきり暮らしだった永年の友人を亡くした。彼のことを「凄いやつ」だったという伊勢さんは、寄り添うのではなく「寄り合う」という表現をした。やっぱりしっくりくる。

（良）

New Communities in the Metaverse

メタバースが紡ぐ新たなコミュニティ

佛子園のこれまで築いてきた「ごちゃまぜ」のリアルなコミュニティと
メタバースのデジタルコミュニティの融合で、新たなコミュニティの可能性を広げよう。

上の画像をご覧ください「なんだろう？」と思われた方がたくさんいらっしゃると思います。こちらの画像は、今年 3 月 18 日～ 20 日に行われた「Vマ（ヴァーチャルマーケット＋）」というメタバースイベントにおける Heart & Beer 日本海倶楽部（以下「日本海倶楽部」）のマーケットブースの様子です。

「メタバース」とは、ネット上の仮想空間や、それにまつわるサービスを指した言葉で、英語の「meta（超越）」と「universe（宇宙）」を組み合わせた造語です。最近では、「Meta（旧：Facebook）」の社名の由来になったことで話題となりました。

メタバースは間違いなく、今後のインターネットの当たり前の姿になると考えられています。メタバースでは国境や言語に関係なく世界中から人々が集まり、自分の分身であるアバターをとおして実世界と変わらない生活をネット上で送ることが可能になってきます。

今年初めに日本トレンドリサーチが「メタバース利用に関する調査」を行ったところ、「メタバース」という言葉について、アンケートした全体の 75.6%の方が「知らない」と回答しました。「知っている」「聞いたことはある」と回答した方でも、実際に利用したことがあると回答したのは 6 割程度で、言葉は知っているが利用したことはないという方が多い状況です。まだまだ皆さんには馴染みのない言葉であり、身近なものではありません。

日本海倶楽部がメタバースのマーケットに出店したのは、コロナ禍において年に数十回出店していた集合型イベントがなくなったことがきっかけでした。実際にヴァーチャルマーケットに参加してみると、集合型イベントでおこなっていた商品販売はもとより、来場されたお客様とのやりとり、商品の魅力発信やニーズの把握なども仮想空間で十分おこなえました。集合型イベントであればスタッフを張り付けにしなければならないところですが、ヴァーチャルマーケットでは、職員がデスクワークをしながらでも販売できます。はじめてのメタバースでの販売売上は 3 日間で数十万円になりました。

対面イベントでは、スタッフの移動費やブース設営等の準備、出店の申請関係など事前調整の手間やコストが掛かりますが、メタバースではそれらを大きく削減することが可能となります。天候による集客の心配などもいりません。

例えば足に障害があったとしても、仮想空間ではアバターが自由に往来し、跳んだりはねたりできます。アバター同士のコミュニケーションも言葉だけではなく文字でも交わせるので、言葉がでない人にとってもコミュニケーションの障害が軽減されるわけです。メタバースは障害のある人の可能性も大きく広げられると思います。

今後、日本知的障害者福祉協会主催の全国大会でもメタバースを採用し、佛子園としてもメタバースを使った研修や出店運営をサポートしていきたいと考えています。佛子園がこれまで築いてきた「ごちゃまぜ」のリアルなコミュニティとメタバースのデジタルコミュニティが融合すると、新たなコミュニティの可能性が広がるのではないかと期待しています。

皆さんもぜひメタバースの世界に足を踏み入れてみてはいかがでしょうか？

日本海倶楽部　竹中誠

特集 佛子園×アジリティ

2022年度の佛子園のテーマはアジリティ（Agility）。アジリティは敏捷性という意味で、ビジネスやスポーツ用語としてもよく聞かれるようになってきた。不確定で先の予測ができにくいVUCA（Volatility（激動）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（不透明性））と言われる時代において、最適に判断し、迅速に対応できるアジリティをもつにはどうしたらいいか。方向性が不透明な中でも動くためには自分の軸となる組織の明確なビジョンは欠かせない。失敗をおそれずに一歩踏み出せる心理的安全性も必要だ。

今号特集では、組織におけるアジリティを高めていくために、佛子園でおこなってきた取り組みをいくつかご紹介していきたい。

会議×Agility

会議を停滞させないための出席者の条件

佛子園には会議を行う時の5原則というものがある。

①会議の目的を明確にする
②目的に応じた人を選ぶ
③進行や記録、発言者などの役割をもつ
④会議に貢献する
⑤会議で決まったことを周知する

の5つ。出席者が会議に貢献するためにも、アジェンダ（議題）や資料の事前回覧は3日前（会議によっては1週間前）と決まっている。この5原則は研修においても同様に適用される。

最近佛子園では、会議のアジェンダに応じて必須出席者と任意出席者を分けるようになってきた。会議に貢献できないとわかっているのに参加させることは、会議を停滞させるだけでなく、その人の時間も奪うことになる。どちらにしてもアジリティは下がってしまうというわけだ。職員自身も自分はこの会議に必要とされているか、必要なアジェンダにだけ出席するかどうかを主体的に考えることが求められるようになる。

会議から情報伝達を省く

会議はその目的に応じて「意思決定会議」「進捗管理会議」「アイデア出し会議」「情報伝達会議」の4類型に分けられる。その中の「情報伝達会議」は佛子園の会議から省くことにした。情報伝達であれば事前回覧でこと足りるし、情報伝達の時間を会議から外していくと、それだけで会議がサクサク進む。

つい最近までパワーポイントなどを使用したプレゼンを会議に多用していたが、アジェンダにおける要旨をA4一枚にまとめる「ストーリー」方式に変更した。ストーリーはいわゆるレジュメとは違い、提起したい事柄を一つの文章にしていく。文章になることでその背景や時系列、どこに問題があるのかなどの事実が整理される。頭の中が整理されていない時は、何を協議していいかわからない未完成のストーリーしか書けないから分かりやすい。

ストーリーは事前回覧されるので、会議当日はそれに対して協議・決定していくだけで済む。プレゼン時間に重きをおくと、いい発表をすることが目的化し一方通行の会議になりかねない。

会議の４類型

会議を活性化させるオフサイトミーティング

会議や研修を活性化するには、いつもと会場をまったく変えておこなうオフサイトミーティングが効果的だ。オフサイト（Off-Site）なので、会議中に職場から呼び出しがかかり中断されるということがない。いつもの職場を離れての会議なので気持ちもリフレッシュして行えるというのも大きな魅力となっている。職場を離れて別の会議室をレンタルしよう！と言っているのではない。馴染みのライブハウスや古民家レストランを貸切ったり、屋外ガーデンに即席ステージを作るなど、会場はそれこそアイデア次第。TPOに合わせてちょっと工夫するだけで職員の遊び心をくすぐる仕掛けができるのだ。

屋外でオフサイトミーティング

会場レイアウトと心理的安全性

場所の工夫とともに、席の配置や会場レイアウトにも気を配る。先日、120人規模でおこなった法人合同研修において、研修参加者とステージ上の進行者が相対する形から、参加者全員が中央を向くように円を描いて座りその間に進行者が座ってやり取りする形に変更したところ、その場の雰囲気が一変したことがあった。相対する形から同じ方向を見る形へ。ただそれだけで心理的安全性が高まり、出席者のレスポンスも良くなったのである。これは普段私たちがごちゃまぜの中で大事にしている「相手と向き合うのではなく、相手と同じ方向を見る」ということと通じている。

会場レイアウトを変えると会議も変わる

情報コミュニケーション×Agility

スマホ活用で情報が早くなる

法人内事業所が能登から加賀まで分散していることから、佛子園では平成19年よりデスクネッツというグループウェアを活用し、法人内コミュニケーションを高めてきた（妙林柿第71号特集参照）。普段は会えない他事業所の職員や、理事長のコメントなども見ることができ、法人内の情報や考え方を画面上で共有できるなど、当時はIT時代の新たなコミュニケーションのあり方を実感したものだ。それから十数年が経ち一億総スマホ時代に突入した中で2年前に導入したのがスラックというコミュニケーションアプリである。

デスクネッツだとデスクワークの時間にパソコンを開いて確認するところ、スマホで見れるのでデスクネッツほどタイムラグは生まれない。もちろん写真も動画も添付でき、日々のちょっとした情報を共有するにはお手軽のツールである。発信されたものに対して絵文字で反応できるので管理職から新任職員、パートスタッフまでフラットな感じでつながれる。

情報コミュニケーションで気持ちも伝播

この春の法人職員歓送迎会もコロナ禍につき、100人超の対面方式での宴会は断念せざるを得なかった。代替えに、いつもお付き合いさせていただいている飲食店舗を10店舗ほど予約して少人数ずつ会食できるようにしたところ、4月はほとんど毎日、各グループから会食の様子がスラックにアップされた。美味しい料理に店主とのやり取り、尽きないお喋りなど、楽しい気な様子は他者の心にも伝播する。

この5月にはブラジルでデフリンピックが開催され、佛子園職員から二人の職員が参加した。12時間の時差を超えて、現地からスラックでレポートされる。スマホを通じた交流が他者を想う気持ちになり、対面した時の話題の糸口にもなっていく。

配慮範囲×Agility

GOTCHA!! RALLYで全国を応援

このゴールデンウィークに全国のごちゃまぜのまちづくりに取り組んでいる仲間たちで始めたのが「GOTCHA!! RALLY（ゴッチャ・ラリー）」。ラリーには「結集する、奮い起こす、集中する」という意味もあるという。コロナ禍でものが売りにくいこの時期に、その地域の特産品を全国の仲間たちで仕入れて、それぞれのスタイルで売って食べて広げていく新たな助け合いの仕組みである。

今回は北海道室蘭のゴチャマーゼ中島さんがつくっている「トンギスカン」を応援。文字通りジンギスカンを豚肉にアレンジした商品だ。たった2週間ちょっとの期間中に5.5tもの豚肉と玉ねぎが室蘭で動いたと聞いている。ラリーを通じて、ゴチャマーゼの皆さんだけでなく、取引先の業者、流通業者も連動して動く。一つを応援するとその地域ごと応援することにもつながっていく。

全国がつながる

GOTCHA!! RALLYで、それまで直接の知り合いでなかった人たちがつながり合えた。ラリーに参加する団体の特徴は、配慮範囲が広くアジリティが高い。面白そうと思ったら行動に移す、参加者同士で情報発信しお互いを高め合う、日頃の感謝を口に出す、いろんな人たちを巻き込む力をもっている。

応援される側のゴチャマーゼ中島さんもアジリティが高かった。ゴールデンウィークを使って全国をごちゃまぜ行脚し、ありがとうを言葉に出す。お互い様の関係性だからこそ、これからもつながり合っていけるのだろう。

働き方×Agility

ポートフォリオワーカー

近年、大企業では副業が推進されている。佛子園もポートフォリオワーカー（＊）としての活躍を職員に推奨している。当法人理事長も現に、（公社）青年海外協力協会代表理事、蓮昌寺住職、行善寺住職、その他各種公職などを兼任している。

ポートフォリオワーカーの推奨は、収入そのものより職員のポテンシャルや知見を広げるための意味合いが強い。いきなり他社への就業や起業に走るのはハードルが高いので、まずは法人内他事業所の業務を所定時間外で経験できるように「JOBコンビニ」を設定した。法人内にプラットフォームを用意して、募集したい事業所と応募したい職員で仕事のマッチングができるようになっている。中には、西圓寺の味噌づくり、各事業所のイベント手伝いなど普段の業務ではできない内容の募集もある。JOBコンビニでの経験が通常業務にフィードバックされ、JOBコンビニをとおして新たな人間関係も築けるので職員のアジリティ向上にもなるという訳だ。

JOB コンビニで地域の方と味噌づくり

定年70歳へ

佛子園では令和元年度より、定年を65歳から毎年一歳ずつ引き上げてきた。令和5年度には定年70歳となる見込みである。

「人生100年時代」を生きるには、これまでの学習・仕事・余暇（老後）という3ステージの考え方が成り立たなくなってきた。60代で老後生活に突入するにはその後があまりにも長すぎる。

同時に従来の「仕事」の時期が延びるということは、その時期に学びなおしてもいいし、先述のポートフォリオワーカーとして働いてもいい。柔軟な働き方も可能になってくる。

定年が70歳に到達した後は「定年自己申告制」に移行するという話が法人内で上がっている。人生設計も多様化していきそうだ。

人生100年時代と生涯賃金

定年後の再雇用で給与が減額されたという世のサラリーマンの話はよく耳にする。佛子園の場合は、それまでと同じ仕事をしている限りは給与の保証をおこなっていく。一般企業に比べると現役職員の給与が爆発的に高いということはないかもしれないが、生涯賃金という考えにおいては太く長く人生100年時代を支えていける制度設計となっている。

「後でしょう」と思っていたらタイミングを逃してた！という経験はないだろうか。そういう意味でもアジリティを高く持つといろんな機会が訪れる。

ひいては人脈や情報、価値観、選択肢も広がっていくことになる。組織においてのアジリティはそのような風土の上になりたつのかもしれない。

（＊）ポートフォリオワーカー
「ポートフォリオ」は複数の書類をひとまとめにした書類入れのこと。そこから派生し、複数の仕事を組み合わせて働く人のことを「ポートフォリオワーカー」と呼ぶようになった。

B's行善寺を取材した NHK金沢放送局 中島ディレクターに聞きました

B's行善寺にNHK金沢放送局の取材が入り、この春に「地域とつくるごちゃまぜ福祉」という番組となって全国放送の「ハートネットTV」に放映された。好評だった同番組は石川県版に再編成され、再放送含めて何度か地上波に流された。

一年以上に渡ってB's行善寺を取材した中島彩ディレクターからみた〝ごちゃまぜ〟はどういうものだったのか、お話を伺った。

放映日は取材された人たちがB's行善寺に集まって視聴していましたね

私も行善寺に行って一緒に観たんですけど、地域の人も含めみんなが自分たちの施設だと思っていることに感動しました。自分がいるところを自慢したいという気持ちが一人ひとりにあるような気がします。

中島Dの周りの反応は？

同僚たちはみんなで職場で観てくれていたみたいです。山本さんが輝いていたと感想をくれました。好きなものを身の回りにおいて、自分の好きな職場で働いて、それを堂々と好きだと言えて。自分たちは素直に出来ていないのではないかと。千咲さんにいろんなことを教えてもらったと話していました。

それぞれ感想に熱がこもっていて、みんなで語れる番組になりましたね。

JOCA（（公社）青年海外協力協会）が6月にオープンする鳥取県南部町のごちゃまぜ施設にも取材に行かれたそうですね

ごちゃまぜのノウハウがあれば本当に他の地域でも根付くことができるのか？という疑問が生まれ、これから生まれる進行形の場を見ることで、住民はどんな思いでそれを受け止めるのか？地域にとってどのような場になり、どのような関わりが生まれるのか？その過程を見てみたいという思いで取材を申し込みました。

B's行善寺も地域に定着するまで大変な苦労があったと伺っていますが、それは北安田が特別な地域だからではなく、日本どこでも〝知らないことで生まれる差別意識〟は根付いていると感じます。

南部町では、JOCAの皆さん、行政の方、地域住民など、さまざまな方にお話を伺いました。私は行善寺の取材を元に「反対派もいるのでは」という仮定を持って現地入りしたけれど、そこで目の当たりにしたのは、住民の多くが「地域に無関心」だということでした。自分たちの町をより良くしたい、変えていきたい、そんな思いを持てない理由も事情もありました。生の声を聞き、町の空気を感じて、まちづくりの難しさを実感しました。その中でも「ごちゃまぜ」の町づくりに奔走するJOCAの皆様と熱い思いを共有している地域住民にも出会いました。数は少ないけれど、1人1人が濃くて、この方たちが地域に波を起こしていくかもしれないと感じました。

南部町取材を通して、雄谷さんが仰っている「問題を抑える（排除する）のではなく、どう向き合っていくかが大事」という言葉の意味を、より深く実感することができました。

番宣の中で中島Dが取材を通して「以前よりも周囲や自分自身を受け入れられるようになった」と言われていたが

ここにいると楽なんですよ。みなさんが堂々と生き生きしていて。利用者さんは思ったことを口にできる素直さとかがあって躊躇がないんです。障がいがあるということも、〝個性として見ないといけない〟というのではなく、純粋に自分自身を生きている感じがして。自分が抱えるコンプレックスも、周りの目を気にせず〝私は私でいいんだ〟と、みなさんと触れ合うことで感じることができました。

みなさんの素直な行動によって、それでまたいろんなコミュニケーションが生まれて回っているということが存在しているので、自分もありのまま自分を出していいし、そのことで周囲も気持ちよく過ごせていけるのかなと教えてもらいました。

「それぞれの見方で何かを感じてもらえたら」とも番宣で言われていました。作り手の意図としてこういうところを見てほしいということは無かったですか？

それは見る人に委ねたかったんです。というのは一つのことを見ても感性が違うのはあたり前だと施設のみなさんに教えてもらったからです。

でも（佛子園職員の感想の中に）「町の中の佛子園の立ち位置が分かった」とありましたが、そこは番組を制作する上で大事にしていました。

まず雄谷さんたちがこういう場所をつくるために奮闘されて、その結果、利用者のひとりの山本さんの可能性が広がったということに注目したんですけど、山本さんが地域に還元し、お互いに作用し合っている部分もあったので、地域に始まり地域で終わるという構成になりました。

一年も取材するのは長いですね

最初の半年はカメラを回していません。まずは馴染んでみようかな、利用者さんに覚えてもらうまではカメラを回したくないなと思ってて。山本さんとは気が付いたら話をするようになっていました。まだ取材をお願いすると決める前からです。

利用者さんのエピソードを聞いて爆笑したことがあって、「あ、爆笑していいんだ」と思いました。障がいのある人のことを大事にしないといけない存在だと思っていたことに気付かされました。一人ひとりの個性としてみていいんだって。面白いことは面白いし、もっといろんな人を見たいなって。沼ですね（笑）

最後に～作り手の責任～

佛子園はとりくみも様々、働いている職員の取り組みも面白いし、描く人によってどんな番組にもなると思います。

だからエンドロールに自分の名前を出すということが大事だと思ったんです。利用者さんのプライベートもさらけだして撮らせてもらって、日々あれだけ輝いている中であの部分を切り取ったのは自分なので。番宣とかも前に出るのは得意ではないけど、あそこは出て自分の言葉で伝えなきゃって。特に今回の取材はその責任があると思ったんですよね。

個人的には挑戦して本当に良かったと思った仕事です。ありがとうございました。